



Title	離人神経症者の内面史的研究
Author(s)	坂本, 昭三
Citation	大阪大学, 1966, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/29021
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名・(本籍)	坂 本 昭 三 さか もと しょう ぞう
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	第 9 4 5 号
学位授与の日付	昭 和 41 年 3 月 28 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	離人神経症者の内面史的研究
論文審査委員	(主査) 教 授 金子 仁郎 (副査) 教 授 西川 光夫 教 授 松倉 豊治

論 文 内 容 の 要 旨

〔目 的〕

離人症の精神力学的構造について多くの研究があるけれども、今なお統一的な見解に到達していないというのが、本症研究の現況である。その理由として、今迄の文献を展望して次の諸点を指摘することができる 1) 多くの研究者は1例ないし数例の分析によって理論を立てているため、その症例の解釈に適應できる理論であっても包括的な理論とはなり得ない、2) 一症状あるいは一部の現象的特徴を取り上げて本症を理解しようとするため、その研究者が本症の特徴としてとらえた現象が何であったかによってその理論に偏りができてくる、3) 種々の疾患に出現する非特異的症狀としての離人症狀と、離人神経症として臨床上の一疾患単位として把握されるものとを厳密に区別せず、研究対象としてこれ等を同次元において考えている。4) 本症狀の特異性に興味が集中され、本症成因の基盤であるパーソナリティ構造そのものの検討が不充分である、という事とその主な理由である。

著者は本症研究の混乱の原因となっている上記の諸点を排除することに留意した。まず、対象例をわが教室で離人神経症と診断している症例に限定し、詳細な症例研究を行なったもの12例を選んだ。本症の構造を理解するのに最も必要なものであり、また今迄の研究に欠けている点でもある本症患者のパーソナリティ構造を本論文で追求しようとした。そうすることが陰性症狀として意味づけが困難な本症の精神力学的構造を理解する正当な道であると考えられるからである。

〔方法並びに成績〕

精神療法的面接を通して得られた内面史を中心に、Thematic Apperception Test を加えてパーソナリティ構造を理解する資料とした。これ等の資料から得られた特徴を次のような諸点に要約することができる。

1) 早期幼児期において、父母の愛情関係が不安定で、情緒的な人間関係における環境偏倚が著し

く大きい。

2) 男子の症例は父に対し、女子の症例では母に対して悪いイメージを抱き、同性の親との同一化形成が障害的である。さらに、親子関係において自己肯定的・受容的な体験を持つ機会が少なく、安定した自己像を内面化し、これを発展せしめるような関係が乏しい。

3) 同胞間の情緒的な結びつきが弱く、家庭内においても孤立的で、家庭の秩序や統一の中に融け込みにくい傾向がある。

4) 対人関係において、幼少時より隔離的・回避的な構えを持ち、拒否された感情や劣等感を抱く者が多い。人間関係に距離のある態度を保持している。

5) 学童期では成績が良く、平均以上の知能を発揮する症例が多い。そして、成績といった知的、形式的なものへの依存性が高く、これによって不安を解消しようとする構えが支配的である。

6) 学童期から思春期にかけて、離人体験に類似した内面的体験を持つ症例が多い。

7) 性格についての自己観として、自我拡張的構えと自我縮小的構えの懂着性を持ち、非依存的・閉鎖的で拒否された感情を抱きやすく、几帳面で形式的なものへの依存性が高く、徹底的で或種の敏感さを持っている。

8) 人間関係での情緒的な結びつきが稀薄で、困難な状況に立ち向う態度が少なく、自己実現を容易に放棄しやすく、適応面での柔軟性が乏しい。

9) 自己の内面的価値の毀損感や立場の喪失感に伴う不安喚起性が高い。

以上のような本症患者に共通した諸特徴を内面史および Thematic Apperception Test の中に見出すことができた。

〔総括〕

上述した諸特徴は、精神療法的接触を通して患者の内面史的世界を観察することによって把握することができる本症患者のパーソナリティ特性である。本症患者に見られる自我機構に伴う情緒的負荷量が稀薄で、極端への指向性を持ち、知的形式的なものへの依存性が高く、自己同一性の障害をひき起しやすい傾向を持つパーソナリティの構造的特性の起源を内面史の中に求め得ることを指摘した。

精神療法という治療的実践の場においては、病態を単に症状としてとらえられる精神病理学的徴候のみによって把握するだけでは不十分であり、症状発現の基盤になっているパーソナリティ構造全体の歪みや偏りにまで洞察と理解を持つことが重要であることを強調した。

論文の審査結果の要旨

離人症の精神力学的構造や成因に関して、今なお統一的かつ決定的な精神病理学的解明が得られていない。本研究ではこの問題を追求するために、離人神経症者12例の精神療法的面接より得られた内面史を中心に TAT (Thematic Apperception Test) の所見を加えて、詳細な症例研究を行なっている。そして、本症者に特異的でかつ共通してみられるパーソナリティ構造を解明して、本症の構造的特性に言及している。

資料を 1) 両親像および親子関係, 2) 同胞関係, 3) 対人関係における態度, 4) 病前性格, 5) 発症前の状況, といった項目の下に整理検討しているが, この中で今迄の研究で明らかにされていない本症者に特異的ないくつかの生活史的事象を指摘している。さらに, これらの事象について考察を行ない, 本症者のパーソナリティ構造の特性を明確化し, これらの特性が離人症の発現に密接な関連を持つという見解を提出している。このようにして, 本症者が示す自我の脆弱性の構造を今迄の研究よりも実証的・具体的に分化・詳細化した形で把握し, 離人症の構造を理解する上に新たな知見を加えている。また, 本症の精神療法のあり方や, その可能性についても, 本研究は重要な示唆を与えている。かかる点に本研究の意義がある。